

# オサムシ掘りをめぐりて<sup>1)</sup>

兵庫県のおサムシ相

高橋 寿郎

オサムシと稱する甲虫は肉食の仲間であらうが野外というか自然状態で出会うことはわりと少ない様に思われる。筆者の経験では春先道路上を忙しく横断するのに出会うがそのような機会は比較的少ない。一番多く見られるのは道路の側溝で落葉などがつもっているような所では落葉をのけてやると結構その下にはいる。

やはり何処の側溝でもと云うわけではないようではあるが、そこでこのオサムシを採集するのにトラップをかける方法がある。トラップに使うエサは黒砂糖に水を加えてトロリトロリとにて酢を加えよくかきまぜて火から下してさらに黒ビール、ショージュウを加えてかきまぜてこしらえる。空カンはその口が地面と平らになるように埋め込みその中に先程のエサを入れておく。前の晩に設置して翌朝その空カンを見てまわる。ただこの方法ではかなり良い場所でないとおサムシが入ってくれない。300個トラップを設置して数匹採集といったひどい報告を耳にする。大変な労力の割には良い結果が得られない場合が意外と多いようでオサムシ採集とゆうのは大変な忍耐と重労働が必要となってくる。そこでオサムシが成虫越冬をするとしたことから越冬しているオサムシを掘り出して採集するとゆう方法がとられるようになった。

この冬季オサムシを掘り出して採集する方法はどうも関西地方が発祥の地のようであり福貴正三氏によると昭和8年(1933)箕面山麓の新稲村へでかけたのが始めてであるとおるようにその頃戸澤信義氏を中心とした関西の熱心な愛好者の方が箕面から南の方に調査を拡げ岩湧山とか金剛山、葛城山などの地域に採集をされたようである(このことは福貴正三氏が“オサムシ採集の思い出 上・下、虫界速報 第26,27号,1952”として詳しく説明しておられる)。

当時は戸澤信義氏が「関西昆虫雑誌」上に“歩行虫の智蔵”を発表になって大いにオサムシの関心を高められたものである(この記事の中味の一部について最近黒沢良彦博士の批判文が発表になったりしている。甲虫ニュース, No., 81, 1988)

兵庫県下で初めてのオサムシ掘りということになるとどうやら米谷正司氏あたりが始めてではないかと考えられる(1902年には大上宇一氏の播磨産のオサムシの記録というのがあるが掘って採集したと思はれるような解説は見当たらなかった)。

1939年当時日本のアマチュア昆虫同好者の指導的、中心的組織「昆虫趣味の会」

1). 兵庫県甲虫相資料

の神戸支部で第1回採集会として同年1月15日一玉山、大阪谷（現神戸市東灘区一玉山町）へ採集に出掛けた。これが恐らく記録に残っている県下での初めてのオサムシ掘りの記録になるかと思う。当日は関公一支部長、米谷正司幹事、満野氏と筆者の4名の出席で筆者にとっては生れて初めてのオサムシ掘りであった。

当日関支部長は寫真機を持参され越冬中のオサムシを撮影され「昆虫界」Vol. 17, No. 64の表紙を飾っている。同時にその日の採集記は同誌Vol. 7, No. 65, 1939の誌上に発表されている。また「採集と飼育」(Vol. 1, No. 3, p120, 1939)にも関支部長は“オサムシの冬期採集”という寫真入り記事を書いておられる（最近出版された“昆虫採集学, 1991”の中で冬期採集法の1つとして崖朽木崩し法が寫真を入れて阿部芳久・直海俊一郎両博士が解説している。p286+297）。

時局は日々に険しくなってきた。昆虫採集どころでは無かった。筆者も第一次学徒出陣ということで中支戦線へ送られてしまった。中国がこのオサムシ類（特にカブリモドキ類）の豊庫であるなんて全く知らなかった。当時コガネムシを調査の中心としていた。その頃米谷正司氏が確が Breuning の “Monographie der Gattung Carabus” を所有しておられご自慢でプレートを見せて下さったことがあった記憶がある位で同時に関公一氏のお宅でタイワンカブリモドキの標本を見せて頂いてそれに関する別刷を頂いた程度の智識しかなかった。せっかくの良い機会にそのあたりのオサムシを調べるといった心構えもなかった。ただ一度強烈な印象に残った事に出会ったことがある。作戦中架橋（筆者は工兵隊）作業で河側の樹木を根こそぎ掘り倒すことをやっていた所樹種はわからなかったが一本の樹の根元から数頭（確か6頭位だったと思う）美しいオサムシがかたまってきた（季節は春先であったと思う。場所は湖北省当陽で宜昌の手前。当時宜昌は中支最前線であった）。手にとって見た瞬間内地で見たことのあるタイワンカブリモドキを思い浮かべ恐らくこの種若くは近似種かと思ったのであるが作戦中で標本にする余裕は無かった。現在の知見からすれば分布の上からエリスカブリモドキ *Coptolabrus elysii* Thomson になると考えられる。なかなか美しいカブリモドキである。2ヶ年の中支ぐらしてカブリモドキにお目にかかったのはこの1回だけであった（もっとも意識して注意していなかったことにもよる）。

さらに2ヶ年ロシヤ、カザック共和国で抑留生活を送ったが此処でも美しいオサムシ類に出会うことが出来た。抑留中約4ヶ月程煉瓦工場で作業に従事させられた。その工場の側溝（煉瓦を乾燥させる場所で土の側溝）に朝出かけてゆくと側溝の隅あたりに何頭かのオサムシを見ることが出来た。中にはミミズを食べているのも目撃した。個体数はわりと多いのであるが種類が一種類であったのか何種類もがいたのかその辺良くわからなかった。いづれもかなりきれいな色彩をし

ていて内地で経験したオサムシのような渋味なものでなく、大きさは内地のオサムシとほぼ同じ位であった。きれいだなぁと感心したものである。いくらかは採集していたのであるが帰国準備のドサクサで標本を見失ってしまっていて持って帰れなかったのが種の確定が出来ない。玉貫光一氏が図説（原色世界の甲虫、1970）されたウリッチオサ *Carabus ullerichi superbus* Kraatz に似ているように思われるのだが、折角2度と行けない地においてながら全く採集もしなかったことが残念で仕方がない（誰もそんなことが出来る環境では無かったのではあるが）。

戦後になると関東地方でオサムシ熱がまづ盛りあがったのではないかと考へられる。京浜昆虫同好会のメンバーによる“オサムシ特集号”（1960, 1970）の立派な会誌が出版されている。東北地方には戦前から活躍しておられた山谷文仁氏が中心となって実に細かい調査を克明にやっておられその集大成が“東日本におけるマイマイカブリの調査研究”（草刈広一氏と共著、らふあえりす、5、1981、“東日本のオサムシ”（東日本オサムシ研究会、1989）の力作となって出版されている。分類学の面から見ると戦後逸早く中根猛彦博士が次々とその分類論文の発表を始められ1962年には日本昆虫分類図説、第2集、第3部、鞘翅目・オサムシ科の出版を見て（北隆館刊）オサムシ科の基礎的な分類をまとめられた。

石川良輔博士もこの類の分類を手がけられその後多くの分類学的論文を発表になられた。この類が後翅の退化して移動が出来にくいことから山脈毎に相違があると云った分類法は外観を一見して同じようであっても交尾器を詳しく見なければならぬと云った別け方で今一つ良くわからない点もありアマチュア的感覚で見えてはいけないようである（他の甲虫の分類なども遺伝子によるとか雌生殖器官の構造による分類とかアマチュアでは近より難い分類法がおこなわれている。それが学問の進歩と云えるのかどうか誰もが簡単にわかるような分類が良いのではないかと思うが、虫に聞いてみてくれと云いたいような分類になりつつあるような気がしてならないのだが）（最近分子による分類解析の新技术でパンダはやっぱりクマの仲間だったと云うようなことが云われている。—科学朝日、602号、1991—大きな動物なのでこのような方法もとれるのであろう）。

石川良輔博士は1991年に“オサムシを分ける錠と鍵”（八坂書房）なる著書を出版になっている。博士が北海道、房総半島など各地のオサムシ採集の状況を詳しく書いておられる。関東ではオサムシ掘りは関西より確率は高いようである（金剛山でのドウキョウオサ発見の経緯など面白い）。

オサムシも北海道にいるオオルリオサムシとかアイヌキンオサムシのような美しいオサムシを数多く並べてその相違を検討された井村有希博士の研究（本職は医者）同博士はこれ以外にも最近次々とオサムシの研究論文を発表しておられる（図説・世界の重要昆虫 Ser. B, No. 1, 2, 1989, 1991）とかこれも美しい世界のオ

サムシシリーズでの図説を発表になられた手塚尚利博士（こちらにも本職は医者）（月刊むし、1983-1989）、フランスの Sciences Nat 社出版の著名な“The Beetles of the World”シリーズの中にも日本のオサムシを数多く含むオサムシの図説が始めて登場した（Vol. 8, 1990）。日本の図鑑を見慣れたわれわれには大変見劣りがするかなりヒドイ標本、解説で私達の感覚では理解し難い出版だと思いが — さらに1989年にはイタリアから「イボハダオサムシ属の総説」“CAV-AZZUTI, P. Monografia del Genere Procerus (Coleoptera, Carabidae, Carabini)”という文献が出版された。日本には縁のないオサムシだが有名であり標本など筆者のような門外漢でも所有している。この文献も専門外であるが一冊購入した。素晴らしい本である。著者はイタリアの画家でアマチュアオサムシコレクターとのことであるが長年にわたりイボハダオサムシとつき合っこの本をこしらえた。写真も豊富だし生態、幼生期、環境の写真も入っている。カットは本職が画家だけになかなか味のあるものである。英語の要約のある以外全文イタリア語である。個人出版のようであるがこんなことが出来る人は幸な人である。中根博士がいみじくも云われたように「甲虫の分類も大分レジャーサマエンスになってきた」（1986）と云う傾向は大いにある。虫を楽しむといったことからお金持の道楽になりつつあるようで淋しい気がしないでもない。

一方関西においては大阪市立自然史博物館の日浦 勇氏を中心とした“近畿オサムシ研究グループ”それに“大和昆虫愛好会”のメンバーも加わって精力的に近畿各地の主としてオサムシ掘りの調査が行なわれそれらの調査結果は“大阪市立自然史博物館研究報告、25号、1971”とか“同館収蔵資料目録第11集、近畿地方のオサムシ”にまとめられ世に紹介された。ただこれらの資料から見る限り兵庫県下でのオサムシの分布調査結果はかなり不十分のように思われたので筆者は戦前を思い出しつつ出来る限り県下各地を再びオサムシ掘りに集中して見た。勿論1人でやる調査であるから近畿オサムシグループのように集団でやるようなわけにもゆかず今だにもつと調べて見たい地点を多く残している結果となっている。ただ一応のまとめは“兵庫生物”に発表させて頂いている（1979, 1980, 1981）。

これらの調査の中で印象に残っているのは大和昆虫愛好会連絡誌 Loomis (No. 36, 1973) にヒントを得て佐用郡の大撫山へ出掛けチュウゴククロナガオサムシ *Leptocarabus kyushuensis nakatomii* (Ishikawa) を多く掘り出したこと同時にアキオサムシ *Carabus japonicus chugokuensis* (Nakane) も掘り出せたこと、美方郡浜坂町の宇都野神社の裏山でダイセシオサムシ *Carabus daisen* (Nakane) を掘り出したことなど忘れられない（大撫山でホソアオタロナガオサムシがいやになる位崖崩して出て来て持って行った大型殺虫管5本に入りきれなくなって掘るのを止めた思い出がある）。

兵庫県下のオサムシの分布は未だ未調査地があるので充分とは云えないが

(最近但馬地方を永幡嘉之氏が精力的に調査を始めておられるので新しい知見がその内発表があると期待している)。

まづ珍しい種というが産地が限られて知られている種は次の通り5種である。

クロカタビロオサムシ *Calosoma maxnowiczi* (Morawitz)

セアカオサムシ *Hemicarabus tuberculatus* (Dejean et Boisduval)

アキオサムシ *Carabus japonicus chugokuensis* (Nakane)

ダイセンオサムシ *Carabus daisen* (Nakane)

チュウゴククロナガオサムシ *Leptocarabus kyushuensis nakatomi* (Ishikawa)

普通に産する分布の広い種としては次の4種である。

オオオサムシ *Carabus dehaanii* Chaudoir

マヤサンオサムシ *Carabus maiyasanus* Bates

ヤコンオサムシ *Carabus yaconinus* Bates

マイマイカブリ *Damaster blaptoides* Kollar

(ヤコンオサムシについては最近7亜種に別けられており — R. Ishikawa & K. Kubota, 1994 —, 鳥取、島根、広島県北部に分布する ssp. *maetai* Ishikawa に兵庫県北部産のものもふくまれるのか検討が必要である。

分布から見てそれ程広範囲に個体数多く見られない種としては次の4種になるかと思う。

エソカタビロオサムシ *Campalita chinense* (Kirby)

最近神戸市内で採集されているが全般に減少していると考えられる。

ホソアオクロナガオサムシ *Apotomopterus porrecticollis kansaiensis* (Nakane)

産地がある程度限られているがその産地では多くの個体を産する。

クロナガオサムシ *Leptocarabus procerulus* (Chaudoir)

オオクロナガオサムシ *Leptocarabus kumagaii* Komiya et Kimura

前者は分布は広いが個体数はそれ程多いと思はれない。神戸市の山の街近くのは体の細いものであったがこのあたりの産地は宅地になって壊滅している。後者も個体数はそう多くないようであり産地もあまり知られていない。

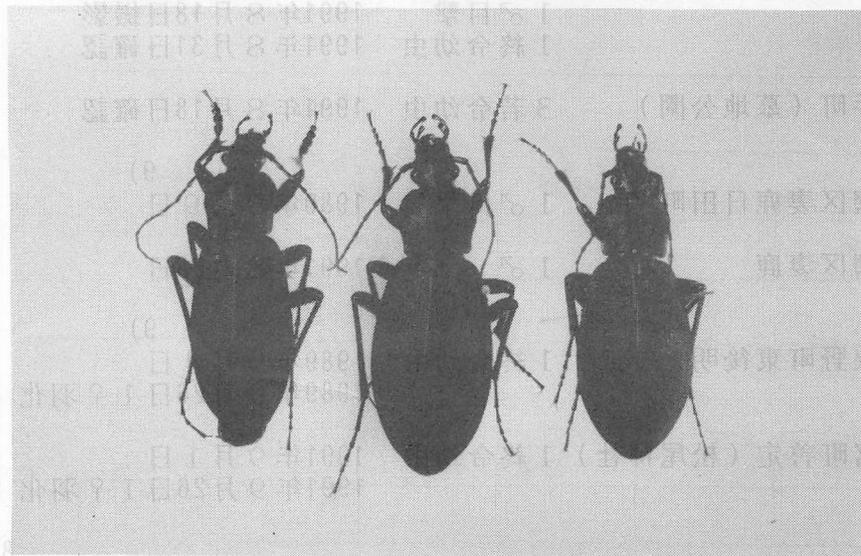
以上が兵庫県におけるオサムシの分布のごく概略である。雪の多い北海道あたりではオサムシ掘りといった採集方法は実際問題として困難であり専らトラップ

による採集方法を用いられているようであるがあまりにも多くのトラップ設置で山容改ると云ったいさきかオーバな表現であるが眼にあまるような現象が現われているとか（お隣の韓国でもあまりのトラップ設置で採集禁止措置がとられたとか）採集マナーが地に落ちていることは事実のようである。

県下多紀郡下において香料によってオサムシ、ゴミムシ類誘引採集によってそこそこの結果をあげられた報告がある（1960, 1961）。

筆者自身やったことはないが機会があればやってみたい方法である。

とりとめもないようなことを書いてきたが宝石のように美しいオサムシの採集は無理とはいえ兵庫県下にもまだお目にかかったこともないオサムシがいないとはいいい切れず未調査地をを何んとか1ヶ所でも探して見たい、掘って見たいと思っている次第である。



佐田郡大橋山が分布の東限に在る

42ウゴククロ+ガオサムシ

左列 佐田郡大橋山産 13-III-1976 体長 35mm  
♀ 25-IV-1976 体長 38mm  
♀ 20-VII-1975 体長 34mm